

よみがえるアンドレス・チリキング

——アンデス地域における文学メディアによる 社会的記憶の回復と再構築¹

後藤 雄介

はじめに

私たちの社会的記憶は常に忘却に晒されている。メディア（情報媒体）、とりわけマスメディアは、日々の出来事を私たちに伝えてくれるが、同時に新しい出来事によって古い出来事を「上書き」し、結果的に忘却を促すこともある。結果的にならまだしも、マスメディアはともすれば情報を意図的に取捨選択・操作し、私たちの目を本来注目すべき出来事から逸らしたり、極端な場合は「報道しない」ことによって、その出来事をそもそも「なかったこと」にする力さえ有している。

こうしたマスメディアによる記憶への介入に抗するためにも、対抗的メディアの存在が欠かせない。メディアにもさまざまあるが、ここではメディアとしての文学に注目したい²。マスメディアは世の中の出来事を「客観的」——あくまでもカッコ付きであるが——に伝達し、まさにその名のおり大量の情報をいちどきに多くの読者・視聴者に届けることができるが、その記憶は一過性になりがちであることに対して、文学メディアは出来事を主観的な解釈のなかに包み込み、限定された読者の求めによってしかその「物語」は示されないが、ひとたびページが開かれればその記憶はある種の持続性を獲得するという特性を持っている³。

しかしながら、文学メディアの持続性も不変ではない。文学もその時々時代の産物であり、時代が変わればそのアクチュアリティが失われていくのもまた事実である。任意の文学作品がアクチュアリティを取り戻すためには、のちの世代による「再読」が欠かせない。新たな読者によって新たな発見がなされ、また新たな解釈が施されることによって、その作品はアクチュアリティを回復し、そして作品が保持する社会的記憶もまた再構築されることになる。そうした風雪に耐えた作品のアクチュアリティはやがて永続的なものになり、そのときその作品は言葉の真の意味で「古典」と呼ばれるであろう。

本稿がここで取り上げるのは、アンデス地域の一国、エクアドルのインディヘニスモ

(indigenismo, 先住民擁護復権) 文学の代表作とされるホルヘ・イカサ (Jorge Icaza, 1906-1978) の『ワシプンゴ』(Huasipungo, 1934) の再読によるアクチュアリティの回復をプロットとしつつ、エクアドルおよびアンデス地域の社会的記憶の再構築を試みたメタ文学的な異色作、エクアドル人作家カルロス・アルコス＝カブレラ (Carlos Arcos Cabrera, 1951-) の『アンドレス・チリキンガの記憶』(Memorias de Andrés Chiquinga, 2013) である⁴。

作品タイトルと同名の主人公アンドレス・チリキンガは、エクアドル北部のインバプーラ県の都市オタバロ出身の先住民 (インディオ) で、ストリート・ミュージシャンにしてオタバロ族の民芸品のヨーロッパ行商人であり、かつ先住民組織のメンバーでもある。彼は2000年、米国コロンビア大学の比較文学社会センターが主催する「アンデス文学セミナー」(以下、セミナー)⁵ に招待されニューヨークを訪れる。セミナー担当教授のリズはアンドレスに、イカサの『ワシプンゴ』について報告するよう求める。じつは彼はこの小説をまともに読んだことがなかった。アンドレスは、同じくセミナーの受講生で米国在住のエクアドル人女性マリア＝クララの協力を得て、『ワシプンゴ』を読み進めてゆくことになる。

以上が『アンドレス・チリキンガの記憶』の粗筋であるが、アンドレスは『ワシプンゴ』のなかに、あるいは『ワシプンゴ』を再読するという一連の経過のなかで、いかなる社会的記憶を再構築してゆくのか。その再構築の行為に対して、私たちはどのような意味を見出すことができるのだろうか。こうした問題関心に沿って、本稿は以下のように展開するものとする。

まず1節では、イカサの『ワシプンゴ』は先住民の置かれた過酷な状況を描写した二〇世紀前半のインディヘニスモ文学を代表する作品ではあったが、そのアクチュアリティは二一世紀の現在、減じてきていると言わざるをえない。それにもかかわらず、アンドレスは時代を「遡航」するかのよう『ワシプンゴ』を再読する。彼は作品のなかにいかなる記憶を見出し、それをどのように現代にすくい上げたのだろうか⁶。

続く2節では、『ワシプンゴ』の読書と平行して、セミナーを取り巻く人々との交流・対話のなかで生じた、アンドレスによるエクアドル現代史の最前線の動乱の「再現」について考察する。具体的には、セミナーの直前に生じた2000年の先住民行動とクーデターをめぐる記憶の検討である。

そして3節では、セミナーの他の受講生が報告したエクアドルの隣国ペルーに関する報告に対して、両国の先住民の置かれた状況のあまりの違いにアンドレスは強い衝撃を受けるのだが、隣国の現実に「越境」的に関わることで彼はエクアドルの社会的記憶をいかに振り返って再構築しようとしたのか、その点を明らかにする。

1. 遡航する記憶——過去の「自分」が／に語りかける

『アンドレス・チリキンガの記憶』の主人公が『ワシプンゴ』の主人公と同姓同名なのは、もちろん著者アルコス＝カブレラによる戦略的な設定である。『ワシプンゴ』の主人公のアンドレス・チリキンガは、『アンドレス・チリキンガの記憶』の作中で亡霊となってよみがえり、しばしば現

代のアンドレス・チリキングの枕元を訪れ（具体的には4回）、対話を重ねてゆく⁷。

登場人物の命名上の戦略はほかにもあり、アンドレスのチューター役のマリア＝クララは姓ペレイラは、『ワシプンゴ』に登場する大地主アルフォンソ・ペレイラのそれと同じである（ちなみに「ワシプンゴ」とは、そうした大地主から先住民農民に対して貸与された土地のことである）。その意味するところは、彼女が先住民が彼らの母語^{ルナシミ}で言うところの「ミシュ」(mishu)、すなわち白人層に属するということである。マリア＝クララは背も「とても高く」、アンドレスとやがて親密な関係になって二人が並んで歩くときは、「俺は彼女の腰に腕を回し、彼女は俺の肩を抱く」のであった（AC: 32）。つまりここには、『ワシプンゴ』の時代より続く白人と先住民のあいだの非対称な関係が象徴されており、『アンドレス・チリキングの記憶』は二人のあいだの非対称性が解かれてゆく物語でもある。

さて、セミナーでの報告に向けてアンドレスは『ワシプンゴ』を読み込んでゆくが、それは具体的には、マリア＝クララに対して定期的に読書メモを提出し（提出は都合5回）、彼女はそれに対してコメントを加えるという形で進められる。

一般的に『ワシプンゴ』はインディヘニスモ文学の代表作として知られているように、作者イカサの意図は総じて先住民の苦境を描くことで、彼らの存在を当時の白人読者に対して可視化しようとしていたと言える。たとえばイカサは、先住民の奉仕労働^{ミンセンガ}によって山岳地に道路が建設されたにもかかわらず、彼らがあたかも「なき者」にされているさまを以下のように描写する。

その後、その地方の誇りとなった道路は、こうして建設されたのだった。…〈中略〉… 全国の新報は、大地主のアルフォンソをはじめ、技師、神父、村役人、…〈中略〉… 奉仕に参加した混血グループの英雄的な功績をたたえ、彼らへの賞賛の言葉と写真でページを飾った。だが、インディオは？ インディオは、いったい、どうなってしまったのか？ …〈中略〉… 彼らはなぜか姿を消した。どの新聞のどの欄にも、一行も出ていなかった。ただの一人も……。恐らく……彼らの風貌や社会的身分が、掲載に値しなかったのだろう。インディオたちは、写真の片隅にさえ出ていなかった。（Icaza 1985: 95 [伊藤訳 1974: 161-162]）

しかしアンドレスは、そうして可視化された不正とは別に、彼にとっては目を覆うような先住民の様子もまた描かれていることを知る。たとえばそれは、妻のクンシをいたずらに暴行・陵辱する過去のアンドレスの姿であり（Icaza 1985: 20-21 [伊藤訳 1974: 29-31]）、祭祀を司る役職者^{プリオステ}に必要な金銭的負担に耐えかねて神父に直訴した仲間のグアラコトを、直後に集落を襲った災害は神父の怒りを買ったからだという理由で、過去のアンドレスも含めた隣人たちがなぶり殺しにするシーンである（Icaza 1985: 96-104 [伊藤訳 1974: 163-177]）。

アンドレスは、自分と同姓同名の男のこうした「蛮行」に納得がいかない。彼は枕元にやってきた過去のアンドレスの亡霊に対して「なぜグアラコトを殺したのか？」のかと詰問するが、過去の

アンドレスの答えは、「俺たちがグアラコを殺した理由はイカサが知っているだろう。…〈中略〉…やつに直接尋ねるんだな」であった（AC: 137）。

アンドレスは『ワシプンゴ』を読み進めるなかで、イカサによる先住民の叙述自体に問題があることに気づいてゆく。彼は読書メモに次のように書き付ける。

イカサは俺たちが何者かを知らない。グアラコの行動はインディオのものではなく、ミシュのそれである。グアラコは職責を果たすため、彼の仲間と、俺の同姓同名の男と、集落全体と相談していたはずである。なぜなら役職者になるとは、それが神父からの依頼だったとしても、その責任は個人ではなく全員に帰するものである。つまりは、みんなの努力によって、祭りはおこなわれるものなのだ。（AC: 150）

アンドレスはみずからの共同体体験に照らして、祭礼の役職者の立ち位置はイカサの理解するようなものではまったくなく、イカサは「俺たちを兄弟殺しのカインとアベルかのような人殺しとして描く」（AC: 150）が、共同体が彼の命を奪うことはありえないと結論づける。

同時にアンドレスは、イカサがアンドレスにまるで獣のように妻を暴行・陵辱させたのは、別途描かれている大地主のペレイラと神父が共謀して村役人の妻フアナを強姦するシーン（Icaza 1985: 60-62 [伊藤訳 1974: 99-103]）に「正当化の口実を与える」（AC: 150）ためだったのではないかとさえ推測する。

このように、同姓同名の過去の登場人物との「遡航」的な対話を通じてイカサの『ワシプンゴ』を批判的に再読するアンドレスの姿を描くことで、著者のアルコス＝カブレラは、一時代を築いたインディヘニスモ文学が持っていた意義を社会的記憶として継承しつつも、同時にイカサが有していた民族的属性（ミシュ＝白人）および時代的制約（マチズム）ゆえに持っていた限界を指摘することで、この作品が二一世紀に「古典」として読み継がれるための条件整備をおこなったと言えるのではないだろうか。

2. 再現する記憶——エクアドル 2000 年動乱を語る

二〇世紀の終盤から今世紀初頭にかけて、エクアドルでは先住民運動が政治社会変革に大きな影響を及ぼした。それはさながら、イカサの『ワシプンゴ』ほかのインディヘニスモ文学の作品が大規模な先住民反乱が権力によって制圧される姿しか描けなかったのに対して⁸、二一世紀においてはあたかも現実がフィクションを追い越してしまったかのようなのである。もっとも、二一世紀型先住民運動は、絶望的な武装闘争ではなく、直接行動もさることながら、先住民自身による長く地道な運動の組織化によるところが大きかった。その経緯は、新木秀和の『先住民運動と多民族国家——エクアドルの事例研究を中心に』のとりわけ第Ⅰ部、「先住民運動の展開と多民族国家の形成」に詳しい（新木 2013: 3-98）。

『アンドレス・チリキンガの記憶』のアンドレスは、『ワシプンゴ』についての報告を準備する傍らで、セミナー外でもさまざまな人々と交流する。そのひとりが、セミナー担当教授のリズの夫で、ペルー人文化人類学者のイルデブランドである。マリア＝クララとともに二人の自宅に招待されたアンドレスは、昼食の最中に、彼自身も関わるようになった2000年の先住民行動とクーデターの経験について語ることを求められる。

2000年の先住民行動は、1990年の最初の大規模蜂起に始まって2013年の憲法改正に結実する、先住民の地位向上を求めた「多民族国家」の理念を具現化する長きプロセスの一局面であった⁹。1998年8月に成立したマワ大統領¹⁰の政権は経済危機により混迷を極め、先住民の全国組織であるCONAIE（Confederación de Nacionalidades Indígenas del Ecuador [エクアドル先住民連合]）が反政府行動を呼びかけた結果、2000年1月には各地に次々と先住民民衆議会が設置された。同年1月21日、先住民行動に軍の一部が呼応することで三権機関が占拠され、マワ政権は打倒される。しかし、直後に結成された軍民政権は短命に終わり、ノボア副大統領が大統領に昇格する形で事態は収束した。

さて、この一連の動乱に対して、アンドレスはどのように関わっていたと描かれるのか¹¹。彼は作中で、実在するFENOCIN（Confederación Nacional de Organizaciones Campesinas, Indígenas y Negras [農民・先住民・黒人組織全国連合]）に所属しているとされている。FENOCINのメンバーは1月の行動にオタバロからも合流することを決定し、メンバー以外からの参加も呼びかける。その際の選定基準としてあるメンバーは「生粋の先住民で、よそ者はお断り」と釘をさすが、ミュージシャンであるアンドレスの呼びかけに積極的に応じたのはアンデス音楽をパンクやヘヴィメタルにアレンジして演奏する地元の若者グループだった。FENOCINの古参のメンバーは彼らを「よそ者」とみなし、「やつらは麻薬に耽っているし、そもそもパンクやメタルは文化ではない」と眉をひそめる。しかし、先住民が各地から集結した首都キトのアルボリート公園において人々の団結を強めたのは、ほかならぬ彼らの演奏であった。彼らの音楽によって公園は祝祭の様相を呈したのである。

上記はあくまでも著者のアルコス＝カブレラによるフィクションである。そのほかにも、中国人マルクス主義者グループの先住民運動への影響力、キトの公園での修道会や市庁舎職員の支援・協力の様子が記述されているが、2000年の動乱中に実際にこのような事実があったかどうかは別途検証しなければならない。しかしながら、アンドレスによる動乱の「再現」には、社会科学的分析からはともすればこぼれ落ちてしまう人間行動・心理の多様な側面をすくい上げるという、まさに歴史の行間を埋める役割があり、そのことが公式の歴史を超えて、あるいはそれとはまた「別」に、社会的記憶をより豊かに再構築していると言えるだろう。

3. 越境する記憶——ペルーの暴力状況を「体験」する

『アンドレス・チリキングの記憶』のストーリーの一部は、セミナーの受講者がそれぞれ選んだアンデス文学の作者・作品について報告を重ねていく場面によって構成されている。アンドレスの課題がホルヘ・イカサの『ワシプンゴ』なのはすでに述べたとおりだが、受講者のひとりのデニスを選んだのは、ペルーの作家フリオ・オルテガ（Julio Ortega, 1942- ）の『さよならアヤクーチョ』（*Adiós Ayacucho*, 1986）であった。

デニスが報告する『さよならアヤクーチョ』が書かれたペルーの時代背景は、アンドレスにとって衝撃の内容だった¹²。センデロ・ルミノソ（Sendero Luminoso [輝く道]）や MRTA（Movimiento Revolucionario Tupac Amaru [トゥパク・アマル革命運動]）のゲリラ活動、およびそうした組織を制圧しようとした軍・警察の過剰な介入により、1980～90年代のペルーはさながら内戦の様相を呈していた。そうした過酷な状況下、ペルーでは暴力をめぐるじつに多数の文学作品が生み出された。デニスは語る。アンドレスは、「アンデスやラテンアメリカにおいて、特定の社会政治状況について、これほどたくさんの文学作品が書かれた国がほかにあったらどうか」と、率直な驚きを隠せない。『さよならアヤクーチョ』の主人公のアルフォンソ・カネパは作者のオルテガが史実に基づいて造形した人物だが（『ワシプンゴ』の大地主のアルフォンソ・バレイラと同名なのは不幸な一致である）、拷問・惨殺の果てに死体を損壊され秘密裡に埋葬された主人公が失われた体の一部を取り戻すべく亡霊としてよみがえり、大統領への直訴状を手に故郷のアヤクーチョの村から首都リマへと向かう悲痛なストーリー¹³に、アンドレスはこぼれる涙を隠そうともしない。そして彼は、次のような思いに駆られるのだった。

なにが悔やまれるかといって、アヤクーチョやワンタの彼らと同じように先住民である自分が、そうした歴史を知らなかったことだ。…〈中略〉…俺たちが *intelculturalidad* とか *pluriculturalidad* とか議論しているあいだにも、ペルーでは同胞たちがハエのように殺されていた。それなのに組織内ではだれもそのことを話題にすらしていなかった。（AC: 137）

上記の引用であえて原語で残した部分は、“*intelculturalidad*”には「異文化共生性」、"*pluriculturalidad*”には「多民族性」の訳語があてられ、新木秀和は、前者は「文化的差異および「多様性の中の統一」に対する尊重に基づく、居住する先住民の多様な文化にともなう相互関連性」、後者は「ひとつの国家の内部に存在する先住民総体の権利の十全な行使を保障する政治原則」と、それぞれ定義づけている（新木 2013: 87）。

前節で触れたように、エクアドルの先住民運動が目指してきたのはこうした原理に基づく「多民族国家」の理想であり、それは2013年の憲法改正によってかなりの程度実現したとすることができる。翻ってペルーでは、エクアドルや（本稿では扱っていない）ボリビアでは先住民運動

が盛んで多くの目標を達成しているにもかかわらず、なぜそのような動きが活発にならないのかということがこれまでも問われてきた。

ペルーの先住民運動の「脆弱性」についてはさまざまな見方があるが¹⁴、筆者もかつてこの問題について論じたことがある（後藤 2013）。そのときの繰り返しになるが、ペルーの文化人類学者ラモン・パフエロの指摘をいま一度引用するなら、ペルーの先住民運動を他国のそれと比較して脆弱だと一刀両断するのではなく、「現にペルーの歴史経験のなかに存在し、それを独特たらしめていることについて問うこと、つまり、本来こうあるべきだと想定されるものではなく、実際にそこにあるものに目を凝らす」（Pajuelo 2007: 21）ことが重要である。

アンドレスは『さよならアヤクーチョ』を通じて隣国のペルーへと「越境」し、まさに「実際にそこにあるものに目を凝ら」したと言える。その暴力的な社会状況を目の当たりにした結果、ペルーのような試練に晒されてこなかった自国の先住民運動の展開はある意味で「幸い」だったのであり、今後ペルーのような歴史が万が一にもエクアドルで繰り返されないためにも、まだまだ発展途上の「多民族国家」の理想をさらに鍛えていかなければならないことを彼は痛感しただろう。そして同時に、エクアドルでまがりなりにも実現した成果を社会的記憶としてペルーへも還元しなければならないと、「彼らと同じように先住民である自分」の責務も感じたはずである。

むすびに

本稿では、文学をひとつのメディアと見立て、任意の作品を読み解くことで社会的記憶の回復や再構築が可能であること検証してきた。具体的には、エクアドルの作家カルロス・アルコス＝カブレラの『アンドレス・チリキングの記憶』を取り上げ、その作品中でホルヘ・イカサの往年のインディヘニスモ小説『ワシブンゴ』を「再読」というメタ文学的な構造に注目し、『ワシブンゴ』の登場人物と同姓同名の主人公アンドレス・チリキングを通じて、それぞれ「遡航」・「再現」・「越境」の観点から、時代的制約を乗り越えた「古典」の現代的読解のあり方（1節）、現代史の記述をより豊かにする社会的重層性の救い方（2節）、そして国境を越えた歴史社会的経験の共有の仕方（3節）を論じ、文学を通じて回復・再構築される社会的記憶を考察してきた。

「社会的記憶は常に忘却に晒されている」と、本稿冒頭で書いた。そうした忘却の危機を救うのは、一過性の情報伝達の繰り返しで成り立つマスメディアではなく、文学、あるいは広義の書物である。しかしながら、文学もまた新たな読み手による再読によって新たな解釈が施されなければ、社会的記憶を保持できるだけの「アクチュアリティが失われてゆく」とも書いた。文学による社会的記憶の持続も「読者」なしには成立しえないのである。その意味で、セミナーを終えたアンドレスがコロンビア大学の図書館を見上げながら述懐した以下の内容は極めて示唆的である。

イカサの本は、たまたま自分と同姓同名の存在を教えてくれた。それはまた、図書館に所蔵されている何千という本のなかでも、その多くは忘れ去られてしまっているけれど、同じような

出合いがきつと起こるはずだということも気づかせてくれた。それらの本は、かつての読者が、そしていまの読者がそうしたように、将来の読者もまた図書館を訪ねてページを繰ってくれることを待ち侘びているのだ。(AC: 201)

映画『いまを生きる』（原題：*Dead Poets Society*, ピーター・ウィア監督, 1989）のなかで、ロビン・ウィリアムズ演じる全寮制ハイスクールの教師ジョン・キーティングは、かつて同校に通いすでに鬼籍に入ってる卒業生たちの色褪せた写真を前に、彼らから発せられるメッセージだとして、現在の生徒にラテン語の“*Carpe diem*”（いまを生きよ）の句を教える。よみがえった過去のアンドレスが現代のアンドレスに語りかけたように、ハイスクールの死者から生者へのメッセージは、さながら図書館のおびただしい書物からの呼びかけのようでもある。「いまを生きる」とは、かつての記憶に耳を傾け、それを新たに生き直す（再構築する）ことであるにちがいない。

[注]

- 1 本稿は、2016-18年度科学研究費・基盤研究(C)「アンデス諸国における21世紀先住民運動をめぐる思想史的研究」(研究課題/領域番号:16K02013)の助成による研究成果の一部である。
- 2 もちろん文学メディア以外にも、ノンフィクションの書物やアカデミックな研究書、また、マスメディアのなかでも「調査報道」という部門での地道で良心的な仕事もあり、対抗的メディアとしてそれらを対象とするのがより相応しいかもしれないが、筆者のここでの関心事ではない。
- 3 2011年3月11日の原発事故の恐怖と不安、その後の脱原発の動きをマスメディアは伝えたが、長続きはせず、恐怖と不安はまさに「忘却」され、原発推進を掲げる現行政権への「付度」なのか、脱原発運動についての報道よりはきわめて鈍い。それに対して、原発事故の経験とその後の流れを切実に描写・記録して残しているのはむしろ文学メディアである。川村 2013, 木村 2013; 2018 を参照。
- 4 以下、本作からの引用に限っては、著者姓略号の「AC」とページ数のみを記すことにする。
- 5 作品中では比較文学学会「センター」(“Center” for Comparative Literature and Society)となっているが(AC: 21)、コロンビア大学に実在するのは比較文学学会「研究所」(“Institute” for Comparative Literature and Society)である(<http://icls.columbia.edu/>)。著者のアルコス＝カブレラは2000年夏に、実際にコロンビア大学の「アンデス文学セミナー」に参加している(AC: 209)。本作はそのときの体験に着想を得ていると思われる。
- 6 過去のものとなりつつある作家とその作品をまさに「現代にすくい上げ」という観点から、筆者は別途、ペルーのホセ・マリア・アルゲダス(José María Arguedas, 1911-1969)の小説群の再読による再構築作業を進めている最中である(拙稿 2016)。
- 7 混乱を避けるため、以後、『アンドレス・チリキングの記憶』のアンドレス・チリキングは単に「アンドレス」、『ワシプンゴ』のアンドレス・チリキングは「過去のアンドレス」と呼ぶことにする。
- 8 ペルーのアルゲダスの『すべての血』(1964年)もこの系譜に属する(Arguedas 1964)。
- 9 本段落の叙述は、新木の著書に依拠する(新木 2013: 56-57)。
- 10 綴りは Mahuad。宮地隆廣は「マワッド」と記している(宮地 2013: 190 ほか)。
- 11 本段落の叙述は、『アンドレス・チリキングの記憶』の第6章の内容の抄記である(AC: 57-63)。
- 12 本段落の叙述は、『アンドレス・チリキングの記憶』の第15章の内容の抄記である(AC: 136-145)。筆者自身の知見に基づく部分もある。
- 13 筆者はこの『さよならアヤケーチョ』(Ortega 2008)について、それを舞台作品として演じたペルーの劇団ユヤチカーニ(Yuyachikani)の活動と絡めて論じたことがある(拙稿 2009)。
- 14 岡田勇は、「弱い社会」という概念で説明しようとしている(岡田 2016: 146-196)。

【文献一覧】（姓アルファベット順）

- 新木秀和 2013. 『先住民運動と多民族国家——エクアドルの事例研究を中心に』御茶ノ水書房
- Arcos Cabrera, Carlos. 2013. *Memorias de Andrés Chilibuinga*. Quito: Alfaguara.
- Arguedas, José María. 1964. *Todas las sangres*. Buenos Aires: Editorial Losada.
- 後藤雄介 2009. 「ペルーにおける多文化主義の行方——劇団ユヤチカーニの文化社会活動を手がかりに」『学術研究——複合文化学編』（早稲田大学教育学部）57号, 43-52 ページ
- 2013. 「社会運動の（不）可能性に関する考察——現代ペルーの事例を中心に」『学術研究——人文科学・社会科学編』（早稲田大学教育・総合科学学術院）61号, 293-300 ページ
- 2016. 「「すべての血」への回帰——ホセ・マリア・アルゲータスを二一世紀に読み継ぐために」『学術研究——人文科学・社会科学編』（早稲田大学教育・総合科学学術院）64号, 261-269 ページ
- Icaza, Jorge 1985 [1934]. *Huasiungo*. Bogotá: Editorial La Oveja Negra. [伊藤武好訳 1974. 『ワシブンゴ』朝日新聞社]
- 川村湊 2013. 『震災・原発文学論』インパクト出版会
- 木村朗子 2013. 『震災後文学論——あたらしい日本文学のために』青土社
- 2018. 『その後の震災後文学論』青土社
- 宮地隆廣 2013. 『解釈する民族運動——構成主義によるボリビアとエクアドルの比較分析』東京大学出版会
- 岡田勇 2016. 『資源国家と民主主義——ラテンアメリカの挑戦』名古屋大学出版会
- Ortega, Julio. 2008 [1986]. *Adiós Ayacucho*. Lima: Fondo Editorial de la UNMSM (Universidad Nacional Mayor de San Marcos).
- Pajuelo, Ramón. 2007. “Nuevas tendencias de participación y movilización política indígena en el Perú.” *Crónicas Urbanas*, 11(12), pp. 19-28.